

# vivo

## 10&11

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

OCTOBER/NOVEMBER  
2006

### CONTENTS

水戸室内管弦楽団 第66回定期演奏会	1~3
SELF PORTRAIT 水戸室内ソリスト 井上 修	3 4
最近の公演から	4
ネットマ&プチ情報	5
インフォメーション	6



写真上・左から;準・メルクル、イアン・ポストリッジ、ラデク・バボラーク  
写真下;準・メルクル指揮 水戸室内管弦楽団(2004年6月/第57回定期演奏会より)

## 準・メルクルの指揮、ポストリッジのテノール、バボラークのホルン！ これは聴き逃せません！

11 / 18(土) 19(日)水戸室内管弦楽団第66回定期演奏会

2004年6月、準・メルクルは颯爽と水戸室内管弦楽団(MCO)の指揮台に登場し、その緻密な音楽作り、溢れる知性、あたたかい人間性によって、ソリスト集団でもあるMCOのメンバーと篤い信頼関係を築きました。その結果である本番での演奏が、多くの聴衆の皆様から圧倒的な支持を得たことは、記憶に新しいところです。準・メルクルの再登場は、MCOのメンバーからも、お客様からも熱望されていました。

それが、今秋、実現します。2年半の時を経て、準・メルクルは水戸に帰って来ます。ドレスデンやミュンヘンでのオペラ公演に加え、昨年9月からはフランスのリヨン国立管弦楽団の音楽監督に就任、来年9月からはドイツのライブツィヒ放送交響楽団の音楽監督を兼任するなど、多忙を極める若きマエストロはしかし、MCOとの仕事もとても重要視しています。ただ1回の共演にして、すでに相思相愛の幸福な関係が築かれている、とも言えましょうか。

また、準・メルクルは、前回、リハーサルの合間を縫って、偕楽園をはじめとする水戸の数々の史跡を訪れました。目の前の音楽だけにとどまらず、それを取り巻く施設や都市の社会的環境や文化的背景を旺盛な好奇心で吸収しようとする姿勢

に、音楽家としての懐の深さをあらためて感じた次第です。

前回の共演のこと、水戸の印象、そして今回の

前回(2004年)の記念すべき幸福な出会いから2年、次の共演を心待ちにしておりました。2回目の共演に向けてのマエストロのお気持ちをお聞かせ下さい。

準・メルクル:また水戸に戻って来て、この素晴らしい室内管弦楽団と仕事し、演奏することができるのですから、とても興奮しています。非常に優秀で、高い積極性を持つ音楽家の方たちと仕事ができるのは本当に素晴らしいことです。また、文化と重要な歴史に満たされたこの閑静な都市・水戸でそれが出来るということは、偉大な演奏を生み出すための大変良い前提条件であると思います。

水戸の聴衆やこのホールの印象はいかがでしたか?

準・メルクル:水戸は、このような素晴らしいホールを備えた芸術施設を持っていて、大変幸せだと思います。音の響きは極上であり、聴衆もまた素晴らしい!! 水戸の聴衆の方々、クラシッ

プログラムのことなど、若きマエストロにEメールでお尋ねしました。

ク音楽を深く愛し、理解していると感じました。皆さんがこのオーケストラに対し素晴らしいサポートぶりを見せていましたね。

今回のプログラム(R.シュトラウス 町人貴族、ブリテン セレナード、ベートーヴェン 交響曲第8番)についてコメントをお願いします。

準・メルクル:3つの作品をつなぐ糸が存在しないので、プログラムについてコメントするのはちょっと難しいですね。しかし、多様性を備えたプログラムと呼ぶことが出来るのではないのでしょうか。ベートーヴェン作品では、私たちのレパートリーの中で最も重要な交響曲の一つを演奏します。この曲についてさらに述べる必要はないでしょう。R.シュトラウスの組曲 町人貴族、これは素晴らしい選曲です。フランス語の題名を持った、最も知られていない管弦楽曲の一つですからね! ここでもう一人のドイツ音楽の偉人は、フランスの物語について言及するのです。その音楽はユーモアと情熱に満ち、また優れたオー



写真; 2004年6月  
第57回定期演奏会より



写真; ポストリッジのCD  
「ブritten 歌曲集」  
(TOCE-55760)

ケストラ書法に彩られています。ブrittenは、パーセル以降、最も重要なイギリスの作曲家です。独奏曲から室内楽曲、管弦楽曲からオペラに至るおびただしい作品の中で、彼は多様性に満ちた音楽を創りあげました。セレナードは彼の作品の中でも特別に愛すべき作品ですね。二人の(!)ソロが登場し、オーケストラと親密な対話を重ねて行きます。

### 最後に水戸の聴衆の皆様に向けて、メッセージ

今回のプログラムについて

2004年の第57回定期演奏会では、ワーグナー「ジークフリート牧歌」、ハイドン「交響曲第101番・時計」、武満徹「雨ぞふる」、シェーンベルク「浄夜」というプログラムが演奏されました。ドイツ・オーストリア系の作品3作に、武満作品がアクセントとして配置される、というものでした。今回の第66回定期演奏会のプログラムは、どのようにして決められたのでしょうか。

まず、準・メルクルは「次はベートーヴェンの交響曲第8番をぜひやりたい」と語りました。前回の共演で、MCOのアンサンブルの精度、多彩な音色、豊かな音楽性に感銘を受けた準・メルクルは、次なる共演では、室内管弦楽団にとってもっとも挑戦しがいのある作品の一つ、ベートーヴェンの第8番を取り上げることにしたのです。伝統的な2管編成で書かれ、古典的な形式を持つ第8番は、一見、ベートーヴェンが退歩したように見えますが、実際は、その複雑さと知的遊戯の精神において、初期の第1番や第2番からは遥かに遠く高いところに達しています。第8番をMCOが演奏するのは初めてとなりますが、準・メルクルとMCOが、一筋縄ではいかないこの傑作交響曲をどう料理するのが楽しみです。

演奏会の最初に置かれるR.シュトラウスの組曲「町人貴族」は、吉田秀和・水戸芸術館館長からの提案で実現しました。ドイツの歌劇場でじっくり鍛え上げられ、現在は世界の一流歌劇場から引っ張りだこの準・メルクルにこそ、振って欲しいと願わずにはいられない曲です。フランスの作家モリエールの戯曲を、脚本家のホフマンスタール、演出家のラインハルト、そしてR.シュトラウスが3人で智慧を出し合いながら現代によみがえらせた「町人貴族」は、当初の構想では劇中劇としてオペラ「ナクソス島のアリアドネ」までが挿入された、それは長大な総合芸術作品でした(上演に5時間あまりを要したそうです)。今回演奏されるのは、

### ジをどうぞ。

準・メルクル:オーケストラと聴衆の皆様にも再会するのがとても楽しみでなりません。このオーケストラは水戸を非常に特別なものにしていきます。水戸室内管弦楽団はこの素晴らしい都市の大使のようであり、水戸を世界に知らしめているのです。どうぞこのオーケストラを守り続けて下さい。そして芸術家たちが皆様のために本当に楽しんで演奏しているのを満喫して下さい。

その後、R.シュトラウスがその付随音楽から抜粋し、創作しなおした組曲版です。モリエールの戯曲やR.シュトラウスら3人の構想を理解し、音符の上に豊かなファンタジーを膨らますことが出来る指揮者でないと、この作品は面白く再現されません。その意味で、当代きってのオペラ指揮者、準・メルクルこそ、この作品のタクトを取るにもっともふさわしい指揮者といえましょう。一方、各楽器がそれぞれソロイスティックに活躍するのも、この作品の聴きどころ。MCOが誇る名手たちに加え、ヴェンツェル・フックス(クラリネット / 6月の第65回定期演奏会での見事なソロが記憶に新しい)、フィリップ・コーシー(トロンボーン / リヨン国立管弦楽団の奏者で、準・メルクルがリヨンから連れてきます)、吉野直子(ハープ / 第65回定期演奏会で工藤重典とフルートとハープのための協奏曲を名演)など、腕っこきのエキストラ奏者たちも多数参加しますので、ご期待下さい。

(ちなみに、「町人貴族」は、1996年の第26回定期演奏会で若杉弘の指揮により演奏されています。このときは、若杉弘が付随音楽から8曲を抜粋した「町人貴族」の音楽を演奏、その後オペラ「ナクソス島のアリアドネ」を上演、というものでした。今回は、R.シュトラウス自身の構成による9曲からなる組曲版が演奏されます。)

さて、この2曲が決まったところで、嬉しいニュースが飛び込んできます。MCOもかねてから共演を切望していたイギリスの名テノール、イアン・ボストリッジが準・メルクル指揮 MCOの定期演奏会に参加したいと申し出てきたのです。準・メルクルももちろん乗り気になってくれました。さて、何を歌っていただくか? イギリスのテノール歌手に、MCOが誇るホルンの天才パボラークと来れば、もうこの曲しかありませんね。ブritten作曲、テノール、ホルンと弦楽合奏のための「セレナード」です。ブrittenと親交を結んでいた往年のイギリスの名テノール、ピーター・ピアーズのために作曲された作

品ですが(ピアーズの独唱、ブrittenの指揮による名演がCDで残されています)、そのピアーズの歌唱を超えるのであればボストリッジしかいないと断言できます。ボストリッジは、古き良き時代の黄昏と夜へのロマンティックな憧憬を、見事に現代によみがえらせてくれるでしょう。ちなみに、ボストリッジがサイモン・ラトル指揮「ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団(ホルン独奏:パボラーク)」と組んだ「ブritten 歌曲集」のCDも昨年リリースされ、その素晴らしい歌唱を事前に聴くこともできます。ここでのベルリン・フィルの弦とMCOの弦を聴き比べてみるのも、面白いかもしれません。MCOがベルリン・フィルに優るとも劣らない、類まれな美しい弦の響きを持つグループであることを実感していただけたと思います。

このようにして、ドイツ・オーストリア系の2つの作品の間に、20世紀イギリスが生んだ珠玉の作品が挿まれた魅力的なプログラムが出来上がりました。しかし、R.シュトラウスの「町人貴族」がフランス的な色彩をも身に纏う作品であることを考えると、準・メルクルが語るように「多様性を備えたプログラム」と言うことも出来るでしょう。また、3曲どれもが「古い器に新しい酒を注ぐ」精神に満ちた作品であることにも、注意しておく必要があります。

### 新時代のテノール歌手 イアン・ボストリッジ

細身で長身、というテノール歌手らしくからぬルックスを持つイアン・ボストリッジ。さらに、音楽大学ではなく、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学に進学、歴史と哲学を学び、博士論文「イギリスにおける魔術の低迷」は出版もされているという、歌手らしくからぬ学歴を持っています。これはちょっと普通のテノールではないな、と期待を抱かせますね。

学術研究の傍ら、アマチュア的に歌う活動を続けていたボストリッジは、1991年のエジンバラ音楽祭「真夏の夜の夢」への出演をきっかけに、研究職から歌手へ転向することを決意します。94年、ロンドンで入場料を取らない小さなコンサートに出演したとき、客席にいたEMIのチーフ・プロデューサーに見出され契約。そして、95年には、サイトウ・キネン・フェスティバル松本での小澤征爾指揮「ストラヴィンスキー 放蕩児の遍歴」に出演、とトントン拍子に第一線へ上り詰めました。

ボストリッジの特長は、まず自然な声にあります。伝統的なベル・カント唱法により訓練されたプリラテンなイタリアの声とも、生の声を出さず、包み込むような柔らかさを持つドイツの声とも違う、すが



写真左;水戸ソリスト  
右;井上 修

すがしい声。やはり、ピーター・ピアーズ、マーティン・ヒル、フィリップ・ラングリッジといったイギリスの名テノールの系譜に属するとも考えられますが、ポストリッジは音楽大学などで専門的な声楽の勉強をしていないため、より「語り」に近い発語と声を持っています。例えば、ドイツ・リートにおいては、その「自然さ」を武器として、あまりに教養的に聴こえることもあるドイツ・リートの性質や構造を超えて、音楽に瑞々しい息吹を与えるのです。内田光子との「美しき水車小屋の娘」、レイフ・オヴェ・アンズネス(来年2月に来水しリサイタルを予定!)との「冬の旅」などが、「新時代の表現」、「新たな地平を切り開く歌」などと高名な評論家やジャーナリストからさかんに賞賛されたのも、そのようなポストリッジの歌唱が極めて斬新に聴こえたからでしょう。ポストリッジは、おそらく、現代のリート歌手の中で最も先鋭な意識を持つ歌手の一人です。

そのポストリッジが、大陸の、異国の歌曲に對するときの鎧を脱ぎ去り、心からリラックスして歌

うことが出来るのが、母国イギリスの歌曲です。中でも傑作に数えられるブリテンの「セレナード」は、ポストリッジも何度となく歌ってきた、いわば

#### ポストリッジからのメッセージ

マエストロ小澤が音楽顧問を務める水戸室内管弦楽団と共演する事が出来て光栄に思います。いまからとても楽しみにしています。私がブロの歌手として最初に仕事をさせていただいたのは、1995年のマエストロ小澤指揮によるサイトウ・キネン・フェスティバル松本でのことでした。その際、彼のエネルギー、音楽性、そして優しさに対してとても深い感銘を受けました。

ブリテンの「セレナード」はあらゆる声楽のレパートリーの中でも最も偉大なものの一つといえるでしょう。大変にドラマチックで美しい曲です。私はあらゆる場所で何十回と歌ってきましたし、2回も録音をしました。しかし、歌うたびに

十八番ですから一層期待は高まります。

最後に、ポストリッジから届いたメッセージをご覧ください。  
《関根》

いつも新しい発見があり、新鮮な驚きを味わうのです。この曲を日本で歌うことが出来てとても光栄に思います。「セレナード」は正真正銘の現代曲です。まだ作曲されてからたったの60年しか経っていません。しかし、聴く側にとってたいへんに親しみ深い曲であり、それであって低俗さといったものとは程遠い曲なのです。

私は常に新しい指揮者と出会うことに喜びを感じています。準・メルクル氏と共演する日を心待ちにしています。また、ラデク・パボラーク氏は大変に力強くまた詩的情感を持つプレイヤーだと思います。

皆さんに「音楽」という共通言語で書かれたこの素晴らしい英国の作品を楽しんでいただけたら幸いです。

## SELF

## PORTRAIT

モーツァルト生誕250年記念  
水戸市在住のクラリネット奏者・兼氏規雄がリーダーを務め、今回は県内の気鋭の管楽器奏者たちで構成された「水戸ソリスト」の演奏会です。

### 10 / 14(土) 水戸ソリスト 室内アンサンブル 第5回定期演奏会

今年はモーツァルトの生誕250年にあたるため、国内でも記念の演奏会や催しが数多く開かれ、モーツァルトやクラシック音楽への関心が高まりました。今回の水戸ソリスト第5回定期演奏会では、その祝年にふさわしい「グラン・バルティータ」をメインに取り上げます。この曲は管楽器のみのアンサンブルとしては最大規模の13奏者を必要とし、その中には特殊管楽器である2本のバセットホルンやコントラファゴットも含まれています。また、当時としては珍しかったクラリネットも加わり、かつてない豊かな編成の管楽器群が用いられることによって、モーツァルトの音楽で最も色彩豊かな

作品となったのです。曲は全部で7つの楽章から成りますが、中でも第3楽章の「アダージョ」は傑出しています。映画『アマデウス』において、この第3楽章を聴いたサリエリが、モーツァルトの才能に打ちのめされ「神はなぜ私ではなく、かくも下劣な若造を選んだのか?」と独白する名場面で解説されている通り、奇跡的な甘美さに満たされています。

使用されている特殊楽器について、皆様あまりなじみがないと思いますので少々解説します。バセットホルンとは名前はホルンでも、実はクラリネットの仲間です。クラリネットよりも4度低いF調の楽器で、音域的にはアルトクラリネット(E♭調)と半音違うだけなので、これで代用することも多いようです。しかし、バセットホルンは管の内径が通常のクラリネットと同じため、しっかりとし、美しく澄んだ優美な音色を特徴とします。遺作となった「レクイエム」ではソロの多い重要な楽器として活用されているので、その音色をご記憶の方もいらっしゃるかと思います。コントラファゴットは普通のファゴットよりさらに1オクターブ低い楽器で、木管の最低音域を担当します。

このように「グラン・バルティータ」は、特殊楽器も使い多くの人数を必要とするため、名曲であるにもかかわらず演奏される機会は極めて少なく、水戸芸術館でも今回が初演となります。

演奏会前半は、同様に水戸芸術館初演となる「ピアノと管楽器のための五重奏曲」です。モーツァルト唯一のピアノ五重奏曲で、彼自身が父親あての手紙に「生涯これまでの最高作品」と書いたほどの自信作です。後にベートーヴェンも全く同じ編成の曲を1つだけ書いていますが、楽章配置も同じで、しかも同じ変ホ長調です。ウィーンでの成功を渴望する若きベートーヴェンにとって、様々な意味で超えなくてはならない魅力ある作品だと考えていたのでしょう。これについてアインシュタインは以下のように評しています。

“モーツァルトがこの曲で、コンチェルト的なものとの境界線に触れながら、しかもこの線を踏み越えない感情の繊細さは、ただ感嘆すべきもので、ベートーヴェンが凌駕しうるものではない。”

「グラン・バルティータ」と「ピアノ五重奏曲」は、ケッヘル番号の隔りがありますが、最近の研究では全く同時期(1784年2月~3月)の作品との見方が多く、初演も僅か9日違いだったと言われています。趣は異なりますが、モーツァルトの最も実り多かつた円熟期に作曲された、2つの珠玉の名曲を是非お楽しみ下さい。

兼氏規雄





\* nettama=ネットワークする猫、タマ。  
芸術館のコンサートをサカナに  
いろんなどころへnettamaします。

## イギリス音楽駆け足紀行

今度の水戸室内管弦楽団第66回定期演奏会でとりあげられるブリテンの「セレナード」、お聴きになられたことのある方は、そんなに多くないかもしれない。でも、じっくり耳を傾けてみると、いい曲ですよ。ドイツ・オーストリア音楽の「重厚」、フランス音楽の「洗練」、イタリア音楽の「華麗」といった特徴(ものすごく大雑把な言い方だけれどね)とはまた違う大英帝国の音楽の味だなあ。もしなにか言葉を選ぶとしたら「気品と憂愁」とでも言うべきかな?

しかし、イギリスはビートルズやクイーンを生んだ国だけ、ことクラシック音楽という点意外に「あんまり知らないなあ」という方も多いかもしれない。イギリスにはベートーヴェンやドビュッシーやヴェルディみたいな大作曲家はいない?本当にそうなのだろうか。駆け足でイギリス音楽の歴史を旅してみよう。

イギリスは、いろんな民族が大陸から侵入したり滅ぼしあったりしていた時代が長く、固有の英語による文学や音楽曲が姿を現すのが遅かった、と言われる。とはいえ、グレゴリオ聖歌の時代には地方色豊かな聖歌が歌われていたようだし、13世紀に書かれた精巧なカノン「夏は来たりぬ Sumer is icumen in」はとて有名だ。15世紀になるとパワーやダンススタイルといった名がイギリス最初の大作曲家として歴史上に現れる。特にダンススタイルの柔らかな和声の響きはとて魅力的で、機会があったら彼の宗教曲はぜひ聴いていただきたい。15世紀には『オールド・ホール写本』とか『イートン・クワイアブック』といった宗教曲集が残されており、作曲家たちが複雑な技法を駆使して不思議で霊妙な響きを作り出している。イギリスは聖歌隊の国、と呼ばれるのもよくわかる。

この頃から16-17世紀にかけてがイギリス音楽のひとつの黄金期だろうか。16世紀に入るとすばらしい作曲家が次々と現れている。前世紀から活躍していたコーニッシュやタヴァナーのミサ曲もいいがまずは、エレミアの哀歌の痛切な祈りが印象的なタリスだろう。タリスには54声部のモテット「汝のほかに望みなし」という途方もない曲がある。そして、ミ

サ曲や英語による典礼音楽サーヴィスに名作を残し、ヴァージナルという英国独特の鍵盤楽器のために憂愁の色濃い佳品を書いたバード。世俗音楽曲も盛んで、モーリーとか王様ヘンリー8世もなかなかいい曲を書いている。さらに16世紀から17世紀にかけては「ポスト・バード」の大家ギボンズ。あるいは王の狩猟博士のおやすみなさい」といったユニークな鍵盤音楽を書いたブル。ヴィオラ・ダ・ガンバを複数重ねた「ヴァイオル・コンソート」も英国ならではの憂愁漂うレパートリーで、タイロックス、ジェンキンス、ロウズといった作曲家が魅力的な作品を書いている。そして、大陸をさすらったダウランドのリュート歌曲は、イギリス流メランコリーの極致だ。

17世紀後半にイギリスは最高の天才パーセルを輩出する。彼の劇音楽は絶品ぞろいだ。アーサー王の気品。妖精の女王の幻想。そして、ガイドーとイーニアスの高雅な悲しみ。ヴァイオル・コンソートもありえない和声が頻出するすごい曲が多いし、教会音楽も歌曲(つかの間の音楽は名曲!)も忘れられない。

36歳で死んでしまったこの「イギリスのオルフェウス」を音楽の神があまりにも惜しんだのか、なぜかイギリスはその後、自国から大作曲家を輩出するのはしばらくお休みとなり、大陸の音楽家たちが集まる音楽の一大消費地となる。その代表格がドイツからイギリスに渡った18世紀前半のヘンデルだ。イギリス人にとっては「ハンデル」としてすっかり自国の大作曲家のヘンデル、ユダス・マカベウス、メサイア、サウル、ソロモンなど英語によるオラトリオの名作を数多く残したことはご存知の通り。彼に比べると同時代のアーンやボイスといった英国人作曲家はインパクトでちょっとかなわない。18世紀後半も目立つのはヨハン・クリスチャン・バッハ(大バッハの末子)やアーベルといった外国人音楽家の活躍だ。ちなみにハイドンの「ザロモン交響曲集」は渡英がきっかけで生まれているが、このようにイギリスは大陸の大作曲家の作品を積極的に紹介したり初演したりする重要な場所となり、その傾向は19世紀になっても続く。

19世紀には自国の作曲家はすっかり影が

薄くなり、ギルバート&サリヴァンのコミカルなオペラ(モンティ・パイソンの元祖かな)ぐらいしか目立たない。これじゃあいかんと19世紀末から20世紀初頭にかけて、大英帝国の栄光を取り戻すかのようにさまざまな作曲家が活躍するようになる。筆頭格はやっぱりエルガーだ。威風堂々がやたら有名だが、紅茶の香り濃厚な交響曲第2番やヴァイオリン協奏曲もじっくり腰をすえて聴きたい。チェロ協奏曲は涙の名作。大作オラトリオ「ゲロンティアスの夢」もある。英国色ではヴォーン・ウィリアムスも負けてはいない。グリーン・スリーヴスによる幻想曲が有名だが、9曲の交響曲に聴き応えがある。ロンドン交響曲で首都のざわめきを聴き、田園交響曲にヒース茂る英国の大地を感じよう。いっぽうフランス印象派の風をイギリスに吹き込んだディーリアスも忘れられない。ブリッグの定期市河の上の夏の夜...タイトルだけで聴いてみたくなるね。人生のミサという大曲もある。シャープな切れ味とロマンティシズムが特徴のウォルトンもいいぞ。ヴァイオリン協奏曲はものすごくドラマティックな曲で、20世紀の隠れ傑作協奏曲だ。そうそう、惑星のホルストもある。あの1曲がとにかく有名だが、セント・ポール組曲のようなイギリス的作品こそ彼の本質かも。そのほか、辛口硬派なティベツ、再評価著しい音の詩人パックス、バレエ「チェックメイト」のプリス、おしゃれなパークリー、最近では前衛派のマックスウェル・ディヴィス、ラトルも演奏しているタネジヤアデス...いや、イギリス音楽、個性派ぞろいだね!というわけで次号ではブリテンという人に迫ってみよう。

英国憂愁の極み、ダウランド:リュート歌曲  
(コンソート・オヴ・ミュージックによる全集CD)



